極東発 世界大戦 1

竹島占領

大石英司
Eiji Oishi

立 ち 読 み 専 用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

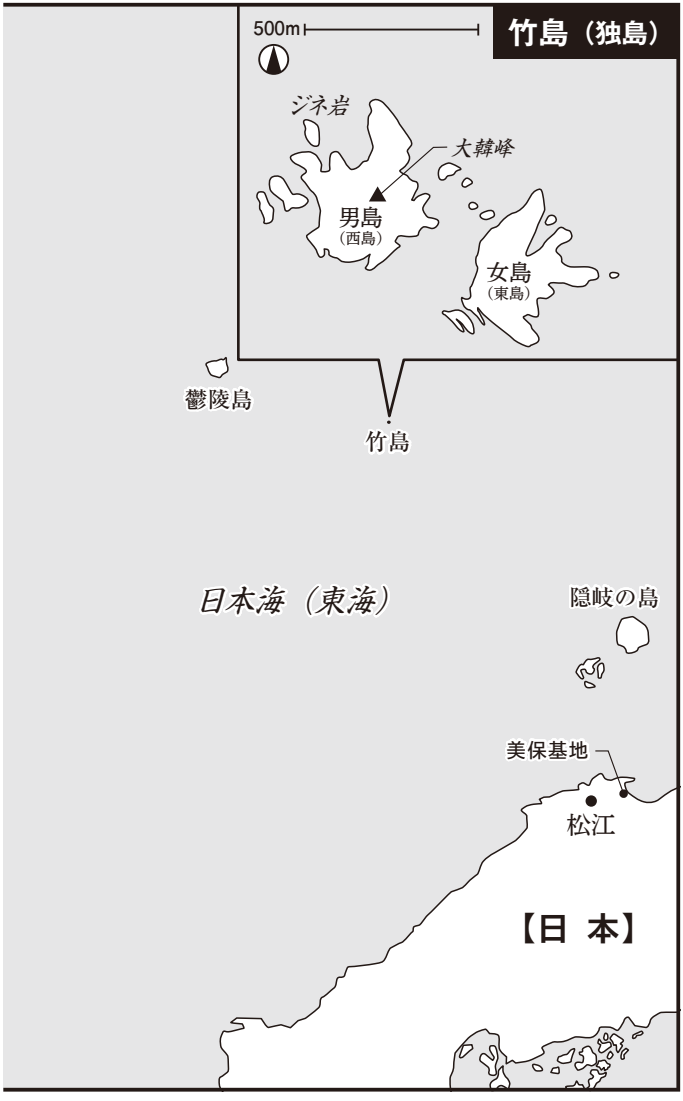
●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画　安田忠幸

地図　平面惑星

目次

プロローグ　11
第一章　帰郷　17
第二章　女性総理　37
第三章　鬱陵島　62
第四章　政府参与　90
第五章　撃沈命令　116
第六章　シー・ライオン作戦　141
第七章　反乱　168
第八章　生け贄　193
エピローグ　209


竹島（独島）
500m
ジネ岩
大韓峰
男島
（西島）
女島
（東島）
鬱陵島
竹島
日本海（東海）
隠岐の島
美保基地
松江
【日 本】

竹島周辺図

登場人物紹介

【日本】

●陸上自衛隊

河合洋史　陸将補。特殊作戦団団長。

《特殊部隊サイレント・コア》

土門康平　陸将補。隊長。

〈原田小隊〉

原田拓海　三佐。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。

待田晴郎　一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

〈姜小隊〉

姜彩夏　二佐。副隊長。元韓国陸軍参謀本部作戦二課所属。

姉小路実篤　二曹。ロシア語遣い。コードネーム：ボーンズ。

〈訓練小隊〉

瀬島果耶　士長。コードネーム：アーチ。

《水陸機動団》

石塚卓　陸将補。水陸機動団団長。

伴野秀男　一佐。第１水陸機動連隊連隊長。

伊地知太郎　元陸将補。政府参与。

●海上自衛隊

《ひゅうが型護衛艦〝いせ〟（一九〇〇〇トン）》

木幡孝造　海将補。第２護衛隊群司令。

宮崎健司　一佐。首席幕僚。

室川貴大　元海将。元自衛艦隊司令官で、現在は神社の宮司。政府参与。

●航空自衛隊

勝野隆　空将。総隊司令官。

中根誠　空将補。北部航空方面隊・第３航空団司令。

荒谷克　三佐。第 301 飛行隊副隊長。ＴＡＣネーム：ヴァレー。

島谷利香　二尉。Ｆ-35 Ａ乗り。ＴＡＣネーム：リーカ。

●防衛省・中央指揮所

門倉博通（かどくらひろみち）　空将。統合幕僚長。

咲田真（さくたまこと）　海将。海上幕僚長。

三雲良介（みくもりょうすけ）　空将。統合作戦司令官。

森山俊郎（もりやまとしろう）　空将。航空幕僚長。

滝村彬（たきむらあきら）　陸将。陸上幕僚長。

長沼荘司朗（ながぬましょうじろう）　元外務省インド大使。政府参与。

穂村大昇（ほむらたいしょう）　元陸将。陸自元東部方面総監。政府参与。

●内閣

山本妙子（やまもとたえこ）　日本初の女性総理大臣。

阿相士郎（あそうしろう）　政権与党副総裁。元総理。

【韓国】

●陸軍

《特殊戦司令部》

洪景求（ホンギョングゥ）　陸軍中将。陸軍特殊戦司令部長官。

尹仁國（ユンイングク）　陸軍中佐。陸軍第 707 特殊任務団第 1 特殊大隊長。

徐勝友（ソスンウ）　陸軍少佐。陸軍参謀本部。

呉恩宇（オウンジュ）　陸軍少佐。陸軍参謀本部。

金康仁（キムガンイン）　陸軍大尉。第 707 特殊任務団第 1 特殊大隊小隊長。

沈現宰（シムヒョンジェ）　陸軍准尉。

●海軍

吉承憲（キルスンホン）　海軍中佐。

●空軍

《第 11 戦闘飛行団第 102 飛行中隊》（大邱（テグ））

徐東健（ソドンゴン）　空軍中佐。隊長。

李一國（イイルグク）　空軍少佐。副隊長。

車民（チャミ）　空軍大尉。竹島奪還作戦志願兵。

朴道永（パクドヨン）　空軍中尉。竹島奪還作戦志願兵。

韓在旭（ハンジェウク）　空軍中尉。竹島奪還作戦志願兵。

宋雅映（ソンアヨン）　空軍中尉。竹島奪還作戦志願兵。

《第17戦闘航空団・第151戦闘飛行隊》（清州）
南宮漢偉　空軍中佐。隊長。

●警察
崔賢宇　巡警。独島守備隊。
李龍洙　巡警。独島守備隊。

●大韓貿易投資振興公社（ＫＯＴＲＡ）
成現宰　元海軍大佐。ＫＯＴＲＡ日本支部のエージェント。

【ロシア】

ゲラーシー・オルロフ　ロシア育ちの朝鮮族。

極東発 世界大戦1　竹島占領

プロローグ

闇に閉ざされた海は、不気味だった。真っ暗闇だ。しかも、隣の島に設けられた灯台が規則正しく瞬くせいで、人間の夜目を奪ってしまう。

ここ数日、曇り空が続いたために、太陽光パネルの効率が低下し、民間世帯の居住施設も兼ねる歩哨所では、電気の使用に厳しい制限が設けられていた。

不運にも、つい三日前、島の自家発電装置が停止し、メーカーから保守要員が来ることになっていたが、彼らを運ぶための観光船は、昨日から運航を停止していた。この時化(しけ)のせいだった。

高さ一六八メートルの大韓(テハン)峰の尾根を走破し、島の北岸へと降りるのが、いつもの決められたパトロール・ルートだった。

歩哨所を出てしばらく登った後、断崖絶壁沿いに歩くが、最後はまた一気に上りになる。しかも、足場は不安定だ。暗い中で歩くのは危険な場所だったが、それはある種の度胸試しでもあった。

こういう天気では、むしろ下りの方が危険だ。足を滑らせると、海岸線まで一気に滑り落ちる羽目になる。

時々、強風が地形に木霊(こだま)して不気味な轟音を立てた。台風ではないが、ここは絶海の孤島だ。吹き付ける風を遮るものは何もなかった。

二人の巡警（巡査）は、階級は同じだが、歳は少し離れている。崔賢宇（チェヒョヌ）巡警は、すでに兵役を終えてからの就職だった。大学受験に失敗し、就職先もなく、兵役後は警察へと入った。

逆に、李龍洙（イヨンス）巡警は、高校を出てすぐ警察に奉職した。だが兵役をこなすために、間もなく職場を離れることになる。

お前は気が弱いから、いきなり軍隊に入ったら虐（いじ）めの対象になる。だからその前に箔を付けろと親から言われた。幸い、船酔いには慣れた。海軍を志願し、二〇カ月の兵役を終えた後、どうするかはまた考えることになる。大学進学は諦めた。四年間も大学に通った挙げ句に、皆就職に苦労している。それが韓国の若者が置かれた厳しい現状だ。

今の韓国には、大卒に見合うホワイトカラーの仕事は僅かだった。

峠を下り始めると、灯台からの死角に入ることになる。下りに入る直前に、歩哨所との無線連絡を取り、これからビーチに降りることを伝えた。ここから先は、無線は通じにくくなる。

羽織ったポンチョが風でパタパタと音を立ててはためいた。

「アシカの話を聞いたことがありますか？」

と李は大きな声で尋ねた。高度が下がると、少し風が和らいだ。この先は、入り江状の地形になっていて、さらに静かになるだろう。

「ここにいたアシカ？　島を奪い返した兵隊が退屈しのぎに撃ち殺して食ったという話だろう？で、脂身でロウソクを作ったとかいう。ただの伝説だよ。動物学者の説明では、アシカは群れで生活する。けど、人間がその生活圏を徐々に侵食したせいで、群れとしての個体数を維持できなくなった。だから絶滅したという話だぞ。漁師がアシ

カの肉を食ったという話は聞かないから、たぶん不味いんだろう。好んで食べるようなものじゃない」

遠くで稲光が走った。一瞬だけ海上を照らし出す。白波が立っていた。普段なら、島を警戒して航行している海洋警察庁の警備艦が見えるはずだったが、この時化で、一時退避を強いられていた。この島では、そういうことが年に何十回とある。

乗組員は大変だろう。いくら海の男たちとはいえ、この時化の動揺ではたまらないはずだ。

二人は、島の周囲を小舟でパトロールすることもある。もう慣れたと思ったそばから時化の海で吐きまくる羽目になった。この時化で、自分らは島に取り残される形になるが、味方の船が避難を余儀なくされるということは、逆に敵の船も近寄れないということだ。北だろうが日本だろうが……。

「これ、週末の交替は大丈夫ですかね？」

「割増手当が付くぞ。それとも、鬱陵島で何か予定でもあったのか？」

この島への派遣は、鬱陵島からのローテーションで回っている。ここに彼らの生活基盤があるわけではなかった。

「たまには娑婆の空気も吸いたいじゃないですか。あんな小さな島でも、娑婆は娑婆ですよ。ここは、刑務所ほど酷くはないにしても。休憩時間にやることもない。毎日、同僚とテレビゲームじゃ、視力が落ちるだけですよ。退屈で死にそうになる」

「軍隊に行ったら、退屈している暇はないぞ」

「おかしいですよね。ここは軍隊みたいなもので、実際、俺たちは軍事基地で訓練を受けたのに、これが兵役扱いされないなんて、なんだか損だ」

「お前は、入隊したら立派な先輩扱いされる。ここでの経験に感謝することになるぞ」

また稲光が走った。今度は、尾根の反対側だった。遅れて雷鳴が轟く。そしてまた稲光、雷鳴……。

前を歩く崔が、下り坂の途中で立ち止まった。

「おい……、あれ、砲声じゃないか？」

稲光はまだ続いていた。背後の稜線がその度にうっすらと浮かび上がる。

「まさか……」

「いや、雷じゃないだろう。それに……、灯台はどうした？　灯りが消えたぞ……」

「またモーターの不調じゃないですか？　あっちも電源周りは調子が悪かったみたいだし」

二人が話している間も、ずっとその雷鳴は続いていた。

「ヘッドランプを消せ！　拙いぞ――」

さすがに、李も、それが砲声であることを認めるしかなかった。

ヘッドランプを消すと、周囲は真っ暗になる。しばらく、夜目が戻るのを待つ必要があった。その間も、ずっと砲声が鳴り響いている。しかも、アサルト・ライフルの連射音も聞こえてきた。

「あれは、味方の銃ですか？」

「いや。銃声がＡＫか味方かを聞き分けるのは俺程度の年季じゃ無理だ」

「無線で歩哨所を呼びますか？」

「やめておいた方が良い。その歩哨所はもうなくなったか、あっても、敵が聴き耳を立てているだけだろう。下手すると、山狩りに遭う羽目になる」

「敵って、誰ですか？」

「日本じゃないか？　極右の総理大臣が誕生したらしいから。天候悪化で、警戒の警備艦がいなくなる隙を狙ったんだろう」

崔は、ポーチからミニマグライトを取り出し、外したグローブの中指部分に突っ込んだ。その状

態で点灯させると、足下を微かに照らすだけになる。
　そして、一瞬だけ仲間の顔を照らした。李はひどく不安そうな顔だった。
「いったん稜線まで戻ろう。そこで、しばらく様子を見る」
「俺ら、せいぜい隣の島まで届く程度の無線機しか持ってない。味方は、応援を呼ぶ暇があったと思いますか？」
「敵が誰にせよ、先にコマンドを潜入させて、無線関係は全部潰した後での攻撃だろう。自家発電装置の不調も、サボタージュが原因だったかもしれない」
「じゃあ、この島のどこかで、俺たちを見張っている敵がすでに潜入していたかもって話ですか？」
「ああ。だが、この天気じゃ、暗視装置を持っていたとしても、何も見えないだろう。そう心配することはないし、敵は、俺たちが本土との通信装置など持っていないことも知っている。今は構っている暇はないと思うな」
「夜が明けたらどうするんですか？」
「いつかは味方が気付いてくれるだろうから、どこかに潜んで、救援を待つしかないな。二人だけじゃ戦えない。無駄死にはご免だろう？」
「もちろんですよ！」
　二人は、歩哨所が見下ろせる稜線上まで登り、双眼鏡を使って暗闇の状況を監視し続けた。銃撃戦は、こちら側はすぐ終わった様子だった。
　だが、東島（トンドゥ）側では、しばらく激しい銃撃戦が繰り広げられているのがわかった。時々、曳光（えいこう）弾が夜空を走るのが見えた。
　ここから五〇〇メートルほど離れた、ヘリポートがある辺りだ。

やがて、照明弾が東島側から上がる。恐らくは制圧完了の合図だろう。彼らがいる西島（ソド）側からも、それに呼応する照明弾が上がった。

東島側の船着き場に、軍艦の影らしきものが微かに見えたが、どこの軍艦かまではわからない。夜明けを待つしかなさそうだった。

二人の警官は、完全に孤立した。他に生存者がいるのか全く不明で、自国の政府が、いつこの事態に気付いてくれるかもわからなかった。

二人は、時折強く叩きつける風雨に耐えながら、これから始まる長い悪夢を覚悟するしかなかった。

第一章　帰郷

陸上自衛隊第一空挺団・第四〇三本部管理中隊、その実、特殊作戦団隷下の特殊部隊（サイレント・コア）副隊長の姜彩夏（かんあやか）二佐は、ソウルの金浦（キンポ）空港で、羽田へと向かう飛行機が離陸するのを待っていた。

故郷は、遠くなる一方だ。次はいつ帰省することになるのか……。しかも、一日中尾行が張り付いているとあっては、帰省気分も吹き飛ぶ。

ボーイング787型機のハッチが閉まり、ターミナル・デッキのボーディング・ブリッジが後退し、誘導路へと走り始める。

だが、機体は、滑走路に乗る前に、また元いたターミナルへと引き返した。

ブリッジと接続された後、機長から、「機材不調のために引き返した」とアナウンスがあった。このまま全員が降りる羽目になるのか、そのままここで点検や修理を行うかの説明はなかった。

ハッチが開くと、二人の男が乗り込んでくる。外事局の私服捜査員だと姜にはわかった。

機体後ろの通路側席に座っている姜のもとに真っすぐ向かってくる。

「降りろ――」と三〇歳前後の男が姜に命じた。

「ここは、日本領土だとわかっているわよね？」

姜は、あくまでも穏やかに尋ねた。

「ああ。だが、機体が地上に留まる間は、領域国

の法律も適用される」
「荷物を取って良いかしら？」
「いいだろう。だが私物は、後で誰かが調べることになる。われわれは命令を受けただけだ。携帯を出してくれ。預かる」
　姜は、乗客皆の注目を浴びながら、頭上の荷物棚を開け、キャリーバッグを出した。ボーディング・ブリッジへと出たところで、「それで、どういうことかしら？」と姜は聞いた。
「何も聞いてない。ただ、われわれは貴方を機体から降ろして拘束するよう命じられただけだ。あんた、何やらかしたの？」
「お墓参りに帰ってきただけよ。一応、私は、日本人ですからね」
「とりあえず、空港警察の取調室に入ってもらう。こっちも忙しいんでね。誰かが来るだろう。どこから来るかは知らないが……」
　姜は、空港警察の留置施設の取調室に放り込まれた。座った席の真正面に、鏡がある。壁に埋め込まれているからマジック・ミラーだろう。頭上の隅っこには、監視カメラがぶら下がっていた。
　そこで一時間近く待たされて、ようやく見知った人間が現れた。
　陸軍士官学校時代の後輩、呉恩宇（オウンジュ）陸軍少佐だった。慌てて着替えたらしく、シャツの襟が片方、ジャケットの内側にめくれていた。
「すみません、先輩！　とりあえず引き留めろと命じられまして。車を飛ばしたのですけど……」
　と呉は、息を切らせながら弁解した。
「私、ただの休暇の帰省よ？　墓参り」
「それが、私も事情を知らないんです。ただ、今朝から参謀本部は殺気立っていまして。いろんな部隊に禁足令が出ています！　何があったんですか？」

「私に聞かないでよ……」
「そうなんですか？　あ、お茶とか用意させましょう！　気が付きませんで」
「いいわよ、そんなの。でも、あまり愉快な帰省ではなかったわね。釜山（プサン）に着いた瞬間から、尾行が付いていたから」
「そりゃ、先輩の帰国を快く思わない連中もいるでしょうからね」
「しばらく帰れないようなら、部隊に電話一本入れたいわ。夕方には顔を出すと報告してあったから」
「はあ……、そうですよね」
　それから二〇分ほどして、背広姿の軍人が現れた。特殊戦司令部の徐勝友（ソスンウ）陸軍少佐を名乗った。
「私は同席して良いのよね？」
　と呉が聞いた。
「聞いてないの？」
　と徐少佐が怪訝そうな顔で尋ね返した。
「軍隊って、そういうところでしょう？」
「どうせ、午後にはニュースになる。遅くとも夕方には。自分は、洪景求（ホンギョング）中将の命令で来ました。つまり、特殊戦司令部長官直々の命令で、貴方を足止めするために来た。昨夜、独島（トクト）が、たぶん北から攻撃を受けて、占領されました」
「あらま……」
　と呉が口をぽかんと開けた。
「正確に、時間帯まではわかっていない。島に味方の生存者がいるかどうかも。それで、軍も青瓦台（チョンワデ）も右往左往の大騒ぎになっている」
　ドアがノックされて、さっき姜を機体から降ろした私服警官が現れた。姜のスマホをテーブルに滑らせて、「ロックを解除しろ！」と命じた。
　姜は、センサー部分に指を当ててロックを解除する。私服警官は、その場でメールの履歴や電話

帳を確認した。
まっさらだった……。使われた形跡は一切ない。
男は「チッ！……」と舌打ちした。
「この、たった一件入っている電話番号は誰だ？」
「旦那よ」
「他に隠し持っている携帯があるだろう？」
「いいえ。こういう時に備えてきました。事実として、私はお墓参りに来たのだし、それ以外の用事はないから、このクリーンな携帯一個だけよ。釜山で買いました」
「酷いじゃないか！　祖国を信用してないのか？」
「そこはお互い様よね。私はずっと尾行されていたのだから。誰かに聞けば、私の立ち寄り先くらいは判明するでしょう。レポートに書けば、上司が誉めてくれるわよ？」
「済まないが、用事が終わったら出てくれ。あと、彼女の私物もここに。容疑者じゃない。あくまでもゲストだ。携帯は置いていけ」
徐少佐が私服警官に釘を刺した。男が、ふん！と携帯をテーブルに投げて部屋を出ていく。
「それでと……。奪還作戦をどうするか、議論が続いています。艦隊は出動準備しているし、われわれが出るのか、海兵隊が出るのかは今後、議論されるが、北とことを構えたくない青瓦台は少し揺れている」
「それ、奪還するしかないじゃないの？」と呉が。
「軍はそうだが、政治はいろいろと事情があるんだろう。それで、軍としては、まずは日本が出てくることを阻止したいと。つまり自衛隊の奪還作戦を」
「貴方たち、真顔でそんなことを考えているの？」

「そっちは、右派の総理大臣が誕生した。当然、そういう方向で来るでしょう？」
「ありません。そんな命令が出たら、自衛隊のトップは全員で辞表を出して抗議するでしょう。一番近い所からだって、日本本土から二〇〇キロも離れているのよ。自衛隊には、ほんの二〇キロ沖合の離島を奪えと言われても無理です」
「それで、あなたは、例の部隊のナンバー2だ。貴方が帰国しなければ、部隊は動けない」
「まず、私の部隊は、そんなことのために動くようなことはありません。それ、洪将軍が言ったの？」
「そうです。皆、賛成しました。中佐を人質に取っている間は、貴方の部隊は動けないだろうと」
姜は、少し苛ついた表情をした。
「単純な事実を指摘するわね。われわれの艦隊が仮に出撃するとして、それは佐世保や呉からということになります。釜山の倍の距離を航海して独島に辿り着くことになる。貴方がたはとっくに独島を包囲した後です。そんな状況で睨み合えると思う？　いつか日本が独島を奪いに来るから軍事費を遣せ！　と主張していた連中の被害妄想よ」
「ある程度は同意しますけどね」
「だいたい北は、その占領した島をどうやって維持するのよ？　海軍力でも今や韓国が圧倒している。空軍力なんてないに等しいのに。彼らの目的は単純でしょう。無人島を占領することで、韓日を離反させることが狙いのはずよ」
「状況は、もう少し複雑です。ロシアの軍艦が近くに留まっているようです。残念ながら、この天気のせいで、島がどうなっているのかさっぱりわかりません。衛星の合成開口レーダーでわかったことは、恐らくロシアの軍艦が沖合に一隻留まり、北のフリゲイトもしくはコルベットが一隻、東島

の船着き場辺りに座礁するなり停泊しているらしい……。それだけです。中型のドローンを飛ばしたが、撃ち落とされた。風が強くて、小型のドローンは近づけない。鬱陵島（ウルルンド）から警備艦を出そうとしたが、ロシアの軍艦がいるということで、取りやめになりました。つまり、独島を常時監視する手段は今、どこにも存在していない」

「貴方たちも、グローバルホークを持っていたわよね？」

「あれは高価だ。撃墜されるとわかっていては飛ばせない。日本こそどうです？　同じものを持っているでしょう？」

「ああ、それは良いわね。うちのグローバルホークが飛んできたら、貴方たち、否応なく戦闘機を緊急発進（スクランブル）させるしかないわよね？」

「二人共！　冗談を言い合っている場合ですか？　たとえば、韓日で協力し合って奪い返すとか……」

姜と徐が同時に、「あり得ない！」とハーモニーした。

「もし私を人質にするなら、ホテルくらい用意してくださいな。あと、日本大使館に電話一本くらい入れた方が良いわね。お宅の公務員を一人預かっていると。日本側はもう気付いたの？」

「いえ。自分が参謀本部を出る時点では、自衛隊に動きはなかった。この時化のせいで、そちらの巡視船もだいぶ離れた位置に避難したようだし。彼らは恐らく、韓国からの臨時速報で、その事実を知ることになるでしょう」

「そうなら、貴方たちは、距離だけでなく、時間でも有利に立ち回れることになる。自衛隊に何かの命令が出たとしても、日本版海兵隊を載せた軍艦が、佐世保の港を出るのは明日の朝よ。これは最短での話。彼らが対馬海峡を通過する頃には、

全てが片付いていることでしょう」
「ええ。政府が正しい判断を下してくれるならね。でも今の政権は、北との融和姿勢をはっきりと打ち出しているから、まずはホットラインで北の指導部に理由を聞いてから動くことになるでしょう。今朝から掛け続けているが、まだ繋がらないそうです」
徐の胸でスマホが鳴り、一瞬、席を外した。
「韓日が協力して独島を奪い返すのって、そんなに変ですか？」
と呉が聞いた。
「韓国軍だけで十分でしょう。それに、そんなこと、国民が許さないわよ」
徐少佐が戻ってきて、呉に向かって、「自分は帰らなきゃならない」と告げた。
「君は、中佐殿を江南（カンナム）にでも連れ出して、昼飯を食べさせてくれ。軍の財布を使って構わない。せめてものお詫びだ。ただ、中佐の身柄をどうするかは、しばらくは流動的だと思って下さい。拘束し続けるのは無意味だと、将軍には報告するつもりですが」
「貴方に感謝すべきかしら？」
「どうでしょうね。韓日での睨み合いは避けられないにしても、衝突だけは回避したいですが」
「それはでも、政治家が決めることよね。われわれはただ、命令に従うだけだから」
「はい。そうです。そうだ。洪将軍からの言づてです。『釜山で、未亡人には会えたか？』とのことです。自分は何のことかわかりませんが」
「そう……。将軍にお伝えください。未亡人に会えた。彼女は、全て知っていたと」
「そう伝えます」
徐少佐が出て行くと、「最近の江南、昔とは見違えるほど発展しましたよ」と呉が言った。

「江南はビジネス街だから、何を食べるにしても高いでしょう。明洞（ミョンドン）で十分よ」
「いえいえ。これは軍としてのお詫びですから。料理の写メを撮って、洪将軍に報告しますから！」
「これから戦争だというのに？」
「でもこれ、海兵隊の仕事ですよね？　あとは空軍と海軍の。陸軍はまあ、38度線を警戒する程度ですよ。あとは、西海（ソヘ）の離島に警戒命令を出すくらいで。せっかく帰郷したんですから、美味しいものを食べましょう！」
姜は、ボスに報告したものかどうか迷ったが、まあ、自分らがそれを知ったところで、動くのは水機団だ。たぶんお呼びが掛かることはないだろう。それに確か、今日は、ボスも故郷で法事のはずだった。
尾行の集団を引き連れていたせいで、まともな食事も取れなかった。この空気が淀んだ殺風景な部屋から出られるなら、理由は何でも良いと思った。
西島（ソド）に取り残された二人の警官は、きつい夜を過ごさねばならなかった。雨は容赦なく、風のせいもあって、羽織ったポンチョの下は、あっという間にビショ濡れになった。ほんの一時間のパトロールの予定だったので、水や食料の類いは一切持っていない。
体温は下がる一方だ。敵の捜索隊が上がってくる可能性に備えて、二人はいったん稜線上から離れ、海岸線沿いへと下りた。
そして、僅かにひさし状に張り出している崖下に立ち、夜が明けるまで、震えながら風雨を凌いだ。
その間、岩を滴り落ちる水を飲み、漂着したペ

ットボトルを回収して水を溜めた。
「昨日の天気予報を見たか？」
と崔巡警が聞いた。
「飯食っている時の独島諸島の天気予報ですか？　どうせ雨でしょう。この低気圧、ずっと東西に伸びているようだから」
「北の岬に、洞窟があるよな。結構でかい……」
「あれは駄目でしょう。干潮時でも、潮が洗う。満潮になったら、溺れますよ」
「じゃあ、あの釣り船か？」
「あれ、穴とか開いてましたよね。引き揚げた時には、半分沈み掛けていた。たぶん、北の漁師が使っていたものだろうけど。二人乗れたとしても、パドルもないじゃないですか？」
「パドルは、明るくなったら、木切れを探すなり、いざとなったら、このヘルメットで漕ぐしかないな。ほんの一〇〇メートル沖合の、ジネ岩。あそこまで辿り着いて、反対側に回れば、ここからは見えない。明るくなったら、敵は間違いなく、山狩りを始めるぞ。遅かれ早かれ、俺たちは見つかる」
「でもこの辺り、潮流が強いから、うっかり海には入るなと警告されてますよね」
「もし、漕ぎ出してみて駄目だとわかったら、引き返すなり、他の岩礁を目指すなりするしかないな。すぐにドローンも飛んでくるぞ。この島に留まる限り、逃げ場はない。こういう窪みを探して移動するにも限界はある」
「ああ、腹が減ったな……。俺たち、本当なら今頃、あの冷たくて、ちょろちょろとしか出ない、爺さんのしょんべんみたいなシャワーを浴びて寝ている頃ですよね」
「そうだな。でもこの水さえあれば、後三日は耐えられるだろう。俺たちの体力なら。こういう時、

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。